

## 防災世界子ども会議 2005 in ひょうご 新聞掲載記事

1. 防災の日 被災の子ら500人教訓伝えたい 世界会議へ事前学習  
神戸新聞 2004.09.01 夕刊 11頁 ター社
2. 英国人画家のクラークさん 再び絵筆で復興後押し 防災世界子ども会議ポスター制作  
神戸新聞 2004.10.16 朝刊 29頁 二神
3. 世界の震災知ろう 檜野台小 留学生と英語で勉強  
神戸新聞 2004.12.15 朝刊
4. 被災者のこころミュージカルで 世界の子と防災を考える  
朝日中学生ウィークリー 2005.01.16 1頁
5. 淡路で子どもテレビ会議 「世界の被災地」交流  
神戸新聞 2005.01.19 朝刊 25頁 淡路2
6. 被災地つなぐ笑顔のエール  
毎日新聞 2005.01.19 大阪朝刊 1頁
7. そこに友達 子どもテレビ会議 僕らの思い海を越え  
毎日新聞 2005.01.19 大阪朝刊 27頁
8. 防災世界子ども会議：イランや米など11カ国の中高生ら、命の大切さ訴える  
毎日新聞 2005.03.19 大阪朝刊 地方版／淡路 25頁
9. 世界防災子ども会議25日開幕 アチェの被害、高校生が報告 淡路夢舞台で  
神戸新聞 2005.03.19 大阪朝刊 25頁 県域2
10. 防災世界子ども会議 25～28日、兵庫・東浦町で開催【大阪】  
朝日新聞 2005.03.19 大阪夕刊 12頁 2社
11. 防災世界子ども会議：11カ国から100人が集うー25日から神戸や淡路で  
毎日新聞 2005.03.23 大阪朝刊 地方版／神戸 27頁
12. 防災子ども会議：兵庫で開幕  
毎日新聞 2005.03.25 大阪夕刊 14頁 社会
13. スマトラ沖地震の被害実態語る 近畿地方整備局でインドネシアの高校生ら  
読売新聞 2005.03.25 大阪朝刊 33頁（地方面／大阪）
14. 世界の子ら復興議論 12カ国・地域から60人参加し防災会議 神戸／兵庫  
朝日新聞 2005.03.26 大阪朝刊 28頁（地方面／神戸）
15. 防災考える「世界子ども会議」始まる 県内各地でフォーラム＝兵庫  
読売新聞 2005.03.26 大阪朝刊 33頁（地方面／神戸）
16. 防災世界子ども会議：次世代へ、津波の悲しみ渡さないーインドネシアのウィザルさん  
毎日新聞 2005.03.26 大阪夕刊 10頁 社会
17. 「身を守る教育を」 津波被災の子ら国際会議  
共同通信 2005.03.27 （全468字）

18. 防災世界子ども会議：スマトラ沖地震被災少女、津波警報システム構築など訴え  
／兵庫  
毎日新聞 2005.03.27 大阪朝刊 地方版／淡路 25頁
19. ゲームや合唱で仲良しに 「防災世界子ども会議」参加者  
産経新聞 2005.3.27 大阪朝刊 27頁（地方面／神戸）
20. 津波被災の子ら 防災など考える 神戸でフォーラム  
中日新聞 2005.03.28 朝刊 2頁
21. 防災、子ども会議で議論——12カ国参加 被災体験や支援策  
日本経済新聞 2005.3.28 朝刊 38頁
22. 「防災について感じ、学び、共有」 世界子ども会議大会宣言＝兵庫  
読売新聞 2005.03.29 大阪朝刊 35頁（地方面／神戸）
23. 防災世界子ども会議：阪神大震災の教訓を未来へ 12カ国から参加——東浦町  
／兵庫  
毎日新聞 2005.03.29 地方版／淡路 27頁
24. 世界防災子ども会議閉幕 災害救援私たちの手で  
神戸新聞 2005.03.29 朝刊 30頁 朝二社
25. 防災のこと世界中で考えよう 12の国や地域から防災世界子ども会議  
朝日小学生新聞 2005.3.30 1頁
26. アチェの高校生2人 母国の家族、無事を確認 スマトラ沖地震  
神戸新聞 2005.03.30 夕刊 11頁 ター社
27. 淡路市などで防災世界子ども会議 考え合う輪 広がった 命の尊さ胸に刻む  
神戸新聞 2005.04.10 朝刊 23頁 神F7
28. 防災 私たちも考え活動が続けよう 防災世界子ども会議 兵庫・淡路島で  
朝日中学生ウイークリー 2005.4.10 2頁

# 被災の子ら500人教訓伝えたい

## 防災の日

# 世界会議へ事前学習

各地に大きなつめ跡を残した台風など、自然の怖さを感じさせた今年の夏、列強は一日、「防災の日」を迎えた。「いつか来る日」を想定し、静岡は東海地震に備え訓練に取り組んだ。阪神・淡路大震災の被災地兵庫では、子どもたちが阪神・淡路大震災の記憶を語り継ぐため、来年の国際会議開催に向け、被災した世界各地の子どもとインターネットで防災などの情報交換を始めた。



エジプトの高校生とテレビ会議で交流する明石市立野々池中学校の生徒たち  
＝兵庫県加東郡社町、県立教育研修所

## 来春 淡路で開催

世界の災害被災地から約五百人の小中高校生が集まる「防災世界子ども会議」は、来年三月二十日（土）から二十八日まで、兵庫県津名郡東浦町の県立淡路夢舞台国際会議場などで開かれる。子どもたちはネットを使って自然災害の被災地の教訓や

### （1）面会

防災の取り組みを情報交換し、どうすれば災害から命を守るか、助け合えるかを話し合い、その成果を「ひょうご宣言」として会議で発表する。

## ネットで中学生 エジプトと交流

国際交流を支援するNPO法人「ジェイアール」（本部・神戸市中央区）が呼び掛け、全国の教師や防災・情報通信の専門家らが実行委員会を作り主催する。震災から九十年となる来年一月に、神戸市で開かれる国際防災会議の「子ども版」を指す。

イラン、アルメニア、エジプト、台湾など海外十一カ国、二十校以上の参加が決まった。日本からは、神戸市の県立舞子高校環境防災科、神戸大付属住吉中や啓明学院中、名古屋の小学校など十五校が参加する。災害発生メカニズム▽各被災地の被害状況▽被害を少なくするための防災力「といったテーマごとに五つのグループに分かれ、会議に向けた調査学習や学校間の情報交換などを始めている。

八月三十一日役には、明石市立野々池中学校の生徒会役員五人が、テレビ会議でエジプトの高校生ら約百人と交流。英語で子ども会議の内容を紹介し、一人でも多くの参加を呼び掛けた。神戸市内で被災した同校三年の辻井美穂さん（15）は「地震はもう絶対に起きてほしくない。でも、まだどこかで起きたら、今度は何とかして助けてあげたい。その方法をみんなで見学する」と話す。

実行委員長の岡本和子さんは「災害から学んだ命の尊さ、共生の大切さを子どもたちの視点で発信、継承できれば、地球規模で防災を考えられる大人になってほしい」と期待する。実行委は運営ボランティアを募集している。☎078・251・6833。（石崎勝伸）

英国人画家の  
クラークさん

# 再び絵筆で復興後押し

防災世界子ども会議ポスター制作

あすから 神戸の個展に出品

阪神・淡路大震災の復興への願いを込めた銅版画制作するなど、被災地とも縁が深い英国の画家クラーク・クラークさんが、来年三月に淡路などで開催される「防災世界子ども会議」のポスターデザインを書き下ろした。十七、十八の両日、神戸市中央区下山手通二丁目、神戸ワシントンホテルプラザで開かれる展示

会場で披露される。クラークさんは、自然と人間への深い愛情を温かいユーモアで描いた作品で知られ、日本でも人気が高い。一九九五年十月には、震災で被災した人たちの心を勇気づけようと、古い港の風景を描いた銅版画「ウィンター・ポート・コーベ」を特別制作した。

子ども会議は、県立淡路舞台国際会議場（津名郡東浦町）などを舞台に、災害から学んだ命の尊さ、共生の大切さを、各国から集まる子どもたちの視点で発想する。ポスターデザインは、クラークさんが趣旨に共感し、制作したという。

展示会には、新作の版画や水彩画、ウィンター・ポート・コーベを含め約八十点を出品。入場無料。両日とも午前十一時～午後八時開場、正午と午後四時からクラークさんのサイン会がある。希望者には同会議のポスターも配布される。同展

実行委員会 ☎06・62・65・5074

防災世界子ども会議2005 in びょうご  
Natural Disaster Youth Summit 2005



クラーク・クラークさんが制作した防災世界子ども会議のポスター

# 世界の災害知ろう

榎野台小 留学生と英語で勉強



写真を見せながらイラン・バム地震の被害を説明する留学生＝西区榎野台3、榎野台小

淡路島で来年一月、開かれる世界子ども防災会議を前に、世界の災害を知ろうと二十四日、西区・榎野台小でイラン人留学生らを抱き、英語を使った防災授業が開かれた。イラン、フィリピン、ルーマニアの留学生ら十二人が六年生の授業に参加した。イランからの留学生レザ・イエガニさん（三三）は、昨年十二月のイラン・バム地震で崩壊した町の写真を示し、「土とレンガ製の建物は一瞬で崩れ約八万人が死亡した」と説明。今月の豪雨で、約千人が死亡・行方不明となったフィリピン

のエミリン・エベスさん（三三）は「水害が多い国なのに危機感はずいぶん薄く、非常袋もなかった」と語った。児童らは約十人ずつのグループに分かれ、「非常

神戸新聞 2004.12.15 朝刊

朝日中学生ウィークリー 2005.01.16 1頁

中学生は阪神大震災当時まだ幼く、記憶も薄れがたですが、「震災のことを伝えていくのは自分たちの役目」という思いを強くしています。震災から十年がたつとき、そ地帯の敷地を生かしたいと、防災を通じて世界の子と私たちと交流している中学生もいます。

## 被災者の心、ミュージカルで

### ●神戸市中央区の渚中学

神戸市中央区の渚中学で、選抜音楽の三年生十人、二年十人開かれた震災関連のイベントなどで披露しました。去年五月下旬から練習



震災をテーマにミュージカルを演じる渚中の3年生（神戸市中央区の同中提供）



地震が超える仕組みなどについて調べ発表する野々池中の3年生（兵庫県明石市の同中）



④スタンドグラスの下絵をつくる第一中学の美術部員と大阪府高槻市の同中  
⑤スタンドグラスの参考にした神戸ルミナリエ



## 世界の子と防災を考える

### ●兵庫県明石市の野々池中学など

また、言葉相通の田中久美子先生が、もう二度、震災やその後のことを振り返ってみたい」とミュージカルを考えました。

三月に兵庫県淡路島で、「防災世界子ども会議2005」が開催されます。国際教育を支援するNPO「JEARIN」が中心になって開催し、スマートフォンなどで被害にあったインドネシアなど地震を経験した国を中心に十五の国や地域から

五十校以上の小・中・高、高校などが参加する予定で、兵庫については、三月の本番までに各学校で話し合い、インターネットで他の学校と交流しています。

## 芸術で心の復興を支援

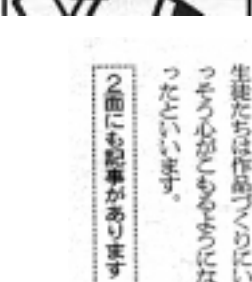
### ●大阪府高槻市の第一中学

芸術で心の復興を支援しているのは、大阪府高槻市立第一中学。美術部員と選抜音楽の三年生約四十人が「防災世界子ども会議」に向けて、切り絵とスタンドグラスをつくっています。

高槻市は、震災で大きな被害を受けた。震災で高槻市も大きな被害を受けた。「すつこい怖かったのを覚えて」と同校に美さん（三年）、芦田有美さん（三年）は「少しでも覚えておきたい。震災で被災した世代、風化させないために、こちらが伝えていかなきゃ」と話します。

高槻市では、震災で壊れた道路や避難所などの写真をもとに、各自が用紙で切り絵を作成しています。その切り絵を美術部員が

作っているスタンドグラスと組み合わせ、長さ六センチの作品にします。デザインは、神戸市が復興のシンボルとしている「ルミナリエ」を参考にしました。高槻市では、震災から十一年、市から交流のあった小千谷市の中学校にお互いのカードを作ってもらいました。指導している岡崎あかね先生は「作品を通して人を元気づけることができる」と



地帯の予知などを調べた辻井美穂さん（三年）は「予知だけに頼るのではなく、自分に出発することを考え行動に移すことが大切」。藤原崇さん（二年）は「助け合いや協力の精神など、心にとめておかななくてはいけないことがたくさんある」と感じています。

いうことを中学生に知ってほしい」と話します。土岐元美先生（五）は、中学三年のとき神戸で被災しました。土岐先生は全校集会で、おばあさんが生き埋めになり三日目に助け出されたこと、水くみや小さい子の世話を大人と同じようにやらなければいけないこと、などを話しました。土岐先生の話を聞いて、生徒たちは作例へんがてら「その心がもてるものになった」といいます。

の面にも記事があります

# 「世界の被災地」交流

## 神戸、明石の生徒ら イランと中継

### 淡路で子どもテレビ会

大地震で被災したイラン 異なれど「復興」が十八日、台湾、アルメニアの 津名郡東浦町の県立淡路三つの国・地域と、兵庫 夢舞台国際会議場で開かれた。イランの子どもたちが交流する「復興への思いが世界」 国連防災世界会議と同を包む絵画展・写真展と 時期に開き、三月末に同テレビ会議（実行委、会議場である「防災世界



イランの被災地を救助する児童ら。現地ともネット中継でつながった (右上) 県立淡路夢舞台国際会議場

### 香寺の香呂南小 募金の活動 英語で報告

子ども会議 in ひょうご に向けて中間発表として開催。会議の様子は三つの国・地域にインターネットを通じて生中継され、会場には被災した子どもたちの絵や写真が展示された。

神崎郡香寺町立香呂南小学校の児童は、書き損じはがきを集めて二〇〇三年のイラン大地震の義援金に換えた活動を、暗記した英語で報告。中継カメラに手を振ると、現地の子ともたちから早速感謝のメッセージが返ってきた。

続いて、啓明学院中学校（神戸市須磨区）や明石市立野々畑中学校などの生徒らも取り組みを発表。テレビ電話では台湾の高校生が、交流のきっかけに謎いぐみを「留学生」として交換しよう活動の報告もあった。

「防災世界子ども会議」ホームページは、<http://ndys.jarrn.jp/>



「日本の友だち、ありがとう」 兵庫香寺町立香呂南小児童と、イラン大地震の被災地バムの子ともたちが18日、日本の淡路島で、インターネット中継によるテレビ会議を行った。国連防災世界

**被災地つなく笑顔のエール**

会議の開催行事で、書き損じはがきを集めて義援金を贈ったのがきっかけ。同小児童は英語で、はがき集めの活動を説明。イランの子ともたちが感謝の言葉を述べた。【追加写真、写真も】27面に詳報

# そこに友達

## 子どもテレビ会議

### 僕らの思い海を越え

兵庫県香取町の香取南小6年生27人が18日、阪神大震災の震源地・淡路島で、03年末に起きたイラン大地震の被災地バムの子とも日本人とインターネット中継によるテレビ会議を行った。書き出しはがきを集めて義援金を贈ったのが縁。児童は「アレヒカメラに向かい、英語劇ではがき集めの様子を紹介しながらメールを送った。7、16歳のバムの子ともたちは「日本の友たち、ありがとう」と口々に感謝しながら笑顔で手を振った。

### 「阪神」震源地から激励

#### イラン地震被災者らと交流

子どもの国際交流を通  
めるNPO法人「グロー  
バルプロジェクト推進機  
構（JEARN）」（本  
部・大阪府高槻市）が今  
年3月に兵庫県で開く、



■第1日

18万回の子とも約1000人が参加する「防災世  
界子ども会議」のフレイ  
ベント。この日開幕し  
た国際防災世界会議の  
関連行事として行われ  
た。  
同小は02年秋から、J

庭や地域にも呼びかけて  
6000枚以上を収集。  
これを現金化し、04年3  
月までに計20万円をイラ  
ンの財団に寄付した。財  
団はこれを義金の一部に  
して、被災した子ども  
のケアなどを目的にし  
た絵を描くための施設  
「ペイントショップ」を  
バムに設立した。  
テレビ会議の中でバム  
の子ともたちは「絵を描  
けたい」。一方、

香取南小の系井健野さん  
（12）は「イランの友だち  
が元気そうで良かった」と  
こぼす。津原正哉さん  
（12）は「ぼくたちの宗  
持ちを伝えたかったの  
で、一生懸命英語の発  
音を練習した」と話し  
た。

【15日香取市】



# 防災世界子ども会議

イランや  
米11カ国  
命の大切さを訴える

25～28日

イラン、米など11カ国  
の10～18歳の子らもた  
ちと県内外の中学生、高  
校生ら約100人が参加  
する「防災世界子ども会  
議」が25日から28日まで、  
神戸市や淡路島で開かれ  
る。最終日にインド洋大  
津波で大きな被害を受け  
たインドネシア・アチエ  
州の代表が会議の宣言文  
を読み上げ、命の大切さ  
などを訴える。  
一行は、神戸市北区の

しあわせの村などで交流  
を深めた後、27日に中央  
区のJICA兵庫国際セ  
ンターで開かれるフォー  
ラムに参加し、災害経験  
に基づく防災のあり方や  
命の尊さなどについて意  
見を交換し、宣言の文案  
をまとめる。  
28日は会場を東浦町の  
県立淡路夢舞台国際会議

場に移して、4日間の活  
動成果を発表して、宣言  
文を採択する。

【小鷹長治】

\*\*\*  
防災世界子ども会議

阪神大震災から10年に  
ちなみ、国内外の子らも  
たちが自然災害による被  
害の軽減などについて考  
える「防災世界子ども会  
議」が25～28日、兵庫県  
東浦町（淡路島）の県立  
淡路夢舞台国際会議場な  
どで開催される。イランや  
台湾など12カ国・地域の  
10～18歳約60人が参加。  
スマトラ沖地震・津波で  
深刻な被害を受けたイン  
ドネシアからも2人が出  
席し、被災時の状況を報  
告する。

実行委員は、最終日の一  
般参加者を募集してい  
る。問い合わせは同推進  
機構（078・251・  
6000）へ。

世界防災子ども会議25日開幕

## アチエの被害 高校生が報告

淡路夢舞台で

二十五日から津名郡東  
浦町の兵庫県立淡路夢舞  
台国際会議場などで始ま  
る「世界防災子ども会議  
2005 in ひょうご」の  
実行委員会は十八日、  
参加者とプログラムを発  
表した。日本を含む計十  
二カ国の小学生から高校  
生まで約六十人が参加。  
昨年十二月のスマトラ沖  
地震で壊滅的な被害を受  
けたインドネシア・アチ  
エ州からも高校生二人が  
来日、被害状況を報告す  
る。

同会議は、インターネ  
ットによる学校間の国際  
交流を支援するNPO法  
人「ジェイアール」（本  
部・神戸市中央区）が中  
心となり、県など共催。  
子どもたちに国際的な視  
野の防災意識を持っても  
らうのが狙い。

イランや台湾など大地  
震の海外被災国のほか、  
国内では兵庫県立舞子高

校環境防災科、東海地震  
の発生が懸念される名古  
屋市の小学校などから参  
加。昨年九月から、被災  
地の教員や防災の取り組  
みをネットで情報交換し  
てきた。  
二十五、二十六の両日  
は、参加者がキャンプや  
里山探検で交流。二十七  
日にスマトラ沖地震の被  
災地などへの支援のあり  
方を考え、二十八日には  
同会議としての宣言文を  
発表し閉幕する。二十八  
日は午後一時から、一般  
参加可能。同実行委員  
078・251・6833  
(石崎勝伸)

毎日新聞 2005.03.25 大阪夕刊 14頁 社会  
読売新聞 2005.03.25 大阪朝刊 33頁 (地方版/大阪)  
未入手

朝日新聞 2005.03.26 大阪朝刊 28頁 (地方版/神戸)

### 防災世界子ども会議

## 11カ国から100人が集う

イラン、米国など11カ国の10〜18歳の子供たちと県内外の中学生、高校生ら約100人が参加する「防災世界子ども会議2005 in ひょうご」が25日から28日まで、神戸市や淡路島で開催される。最終日にインド洋大津波で大きな被害を受けたインドネシア

25日から神戸や淡路で

### 命の尊さなど意見交換、宣言へ

・アチエ州の代表が会議の宣言文を読み上げ、命の大切さを訴える。  
一行は、神戸市北区のしあわせの村などで交流を深めた後、27日に中央区のJICA兵庫国際センターで開催される。

28日は会場を東浦町の県立フォーラムに参加し、災害経験に基づく防災のあり方や命の尊さなどについて意見を交換し、宣言の文案をまとめる。  
【小園長治】

## 世界の子ら復興議論

12カ国・地域から60人参加し防災会議

神戸

国内外の子どもたちが自然災害の被害からの復興について話し合う「防災世界子ども会議2005 in ひょうご」の開会式が25日、神戸市北区のしあわせの村で開催された。イランや台湾など12カ国・地域から10〜18歳

の約60人が参加。英語で自己紹介し、歌を歌って交流を深めた。  
阪神大震災10年を機に、震災の教訓を海外の子どもたちと共有するため、NPO法人グローバルプロジェクト推進機構(同市中央区)が中心に

28日までの期間中、同市北区の国営明石海峡公園内の里山で自分たちの遊び場をつくるほか、インドネシアから参加した子どもたち2人がスマトラ沖地震・津波の被害状況を報告。復興に向けて

協力できることについて話し合う。最終日には東浦町(淡路島)の県立淡路夢舞台国際会議場で、話し合いの成果を宣言として発表する。



ジェスチャーつきで歌を歌う参加者たち=神戸市北区で

阪神大震災から10年を機に、国内外の子どもたちが自然災害の被害軽減などについて考える「防災世界子ども会議2005 in ひょうご」(NPO法人グローバルプロジェクト推進機構、県など主催)が25日、神戸市北区の国営明石海峡公園で始まった。4日間にわたって県内各地でフォーラムなどを開催。27日はスマトラ島沖地震で被災したインドネシアの子どもと人が体験を報告し、最終日の28日には宣言文を発表する。

イランやアメリカなど11か国・地域の10〜18歳の子どもと日本の高校生ら約100人が参加。この日は、同公園で友好を深めるキャンペーンがあ

## 防災 世界の子と考える

### 会議始まる

り、木材やわらを使った小屋作りなどに力を合わせた。県立舞子高校環境防災科2年の中野元太君(17)は「同じ年代が防災の重要性を考えるきっかけにしたい」と話していた。27日の体験報告は午後3時から同市中央区のJICA兵庫国際センター、28日の宣言文発表会は午後1時半から東浦町(淡路島)の県立淡路夢舞台国際会議場で、それぞれ行われる。

力を合わせて小屋作りに挑む子どもたち(神戸市の国営明石海峡公園で)



# 次世代へ津波の悲しみ渡さない

世界1カ国の子もたちが  
神戸市や後路島に集い、防災  
の大切さを話し合う「防災世  
界子ども会議2005」のひ  
まわりで、昨年末のスマ  
トラ地震の被災地、インド

## 防災世界子ども会議

ネパールのネパールから、高校  
生のウイザル・アトリ・メ  
ラツェンが参加してい  
る。津波で母(おと)と弟(い)を  
亡くしたウイザルさんは最終  
日の25日、兵庫県神戸市の鎮  
立後路島で国際会議場で被

インドネシア高校生 ウイザルさん

害状況を報告。津波襲来ス  
テムの構築など、日ごろの備  
えの大切さを訴える。

ウイザルさんの実家は海岸  
近くのチャラン村にあった  
が、村は津波で壊滅的な被害  
を受け、母と弟が水死した。  
10月、離れた全寮制進学校  
で暮らすウイザルさんが悲報  
に接したのは津波の4日後。  
ショックでその場に倒れ込  
み、1カ月は何もする気がせ

ず、眠れない夜が続いた。そ  
んな時に思い出したのが「医  
者になって病院で苦しむ人  
たちを救って」という母の願  
いだ。母の「約束」が生  
きる希望へ変わった。

「経験を語り継ぐことが大  
切。次世代の子もたちは私  
のよう悲しい思いはしほ  
しくない」。多くの命を二  
度奪った津波は悔いが、今は  
世界中の人々に津波への備え

## 「医者になって人々救って」 犠牲の母の願いを希望に



「防災世界子ども会議」に参加する友人らと談笑する  
ウイザルさん(右)＝神戸市北区で25日

の大切さを訴えたい。そんな  
気持ちで日本に来た。

子ども会議は国土交通省や  
兵庫県などつくる実行委員  
主催。25日に開幕し、28日に  
宣言文を採択して閉幕する。  
ウイザルさんはスライドを見  
ながら、被災地の様子を説  
明する。

今年8月に高校を卒業する  
ウイザルさん。不安をいっほ  
いだ。大学進学を目指してい  
るが、津波ですべてを流して  
しまい、学費をねん出できな  
い。帰国したら医学生に進む  
ための奨学金を目標として、  
勉強に行かざるを得ない。

【長尾麻希子、写真も】

「身を守る教育を」 津波被災の子ら国際会議

スマトラ沖地震で被災したインドネシアなどの子どもたちが、被災体験や防災について話し合うフォーラムが二十七日、神戸市で開かれた。

阪神大震災から十年が経過したのを機に兵庫県や神戸市、特定非営利活動法人（NPO法人）などが主催する「防災世界子ども会議」の一環として開催。インドネシアのほか米国、イランなど十二カ国、地域から十一十八歳の子どもたち約六十人が参加、八つのグループに分かれ「減災教育で学校が果たす役割」などのテーマで討論をした。

インドネシア・アチェ州で被災、津波で親類を亡くした高校二年生ムハマド・イクバルさん（17）は「津波とは何かが分からないまま多くの人が亡くなった。学校では災害から身を守る方法は学ばなかった。防災教育が必要」と訴えた。

討論に先立つ講演で、国際緊急援助隊として津波の被災地に派遣された看護師川崎章子（かわさき・あきこ）さんは「現地ではほとんどの子どもが心の病にかかっていた。少しでも笑ってもらおうと、折り紙などで心を和ませた」と活動を振り返った。

会議は二十八日、討論を基にまとめた宣言文を採択して閉幕する。

毎日新聞 2005.03.27 大阪朝刊 地方版／淡路 25頁

⇒ 2005.03.26 大阪夕刊 10頁と内容同一

産経新聞 2005.3.27 大阪朝刊 27頁（地方面／神戸）



つどいでは、じゃんけんなどゲームを通じて子供たちが交流を深めた—神戸市東灘区

# ゲームや合唱で仲良しに

## 「防災世界子ども会議」参加者 「ユニセフのつどい」で交流

阪神大震災十周年を記念して二十五日から行われている国際会議「防災世界子ども会議2005 in ひょうご」の参加者に交流を深めてもらおうと「ユニセフのつどい」（日本ユニセフ協会東支部主催）が二十六日、コトブキこども生活文化センター（神戸市東灘区）で行われた。参加した子供らはゲームなどを通して、楽しみながら国際交流を行った。

つどいは、市立神戸西高（同市西区）と市立淡河中（同市北区）の生徒らによる和太鼓や琴の演奏でスタート。アメリカやロシア、エジプトなど十一カ国三十一人の子供たちを交え、「世界の友達と心をつなごう」をキーワードに、じゃんけんと自己紹介を組み合わせたゲームや合唱などで親交を深めた。

また、子供たちは二十五、二十六の両日、実施された国営明石海峡公園（同市北区）での国際キャンプについて報告。小人数グループでの遊び場作りの結果を、ビデオ映像などを使い、日本語と英語で発表した。

子ども会議は二十八日まで開催され、最終日には東灘区立淡路夢舞台国際会議場（東浦町）で「防災世界子ども会議2005宣言」が発表される。

# 防災、子ども会議で議論

## 12カ国参加 被災体験や支援策



被災地への支援や防災教育のあり方を考える子どもフォーラムが二十七日、神戸市で開かれ、昨年末のインド洋大津波のスマトラ島沖地震について話し合うバンダアチエの子ども会ら(27日、神戸市)

被害にあったインドネシア・アチエ州などから参加した十二カ国の子どもたちが被災体験や防災対策などについて意見交換した。

国際交流を支援する特定非営利活動法人(NPO法人)などが開催する「防災世界子ども会議2005 in ひょうご」の一環。この日は「海外の被災地に自分ができること」「防災学習における

学校の役割」などをテーマに話し合った。兵庫県立舞子高校環境防災科一年の池原彰乃さん(16)が「学校では週に十時間、防災の授業がある」と紹介すると、アチエ州から参加したモハメッド・イクバル君(17)は「避難の方法すら教えてもらったことがないのに」と驚いた様子。

津波で母と弟を失ったアチエ州の高校生、ウ

イザル・ブトリ・メララツナさん(18)は「災害を経験した国は防災教育が進んでいると思った。あんな災害が二度と起きないよう、学んだことを持ち帰って広めたい」と力強く話した。

# 「防災 感じ、学び、共有」

世界子ども会議大会宣言

阪神大震災10年を機に開かれた「防災世界子ども会議2005 in ひょうご」(NPO法人グローバルプロジェクト推進機構など主催)の宣言発表会が28日、東浦町の県立淡路夢舞台国際会議場であった。参加者は「防災について感じ、学び、共有しよう」とした大会宣言をまとめた。

イランやアルメニアなど15か国・地域と日本の子どもたちが、昨年9月から各地の防災教育などを調べ、テレビ会議などで議論。まためとして参加者が25日から県内に集まり、フォーラムなどを開いていた。

ようを防災について考える出発の日として、いつまでもましまさずものを感じ、そこから学び、共有していく活動を続ける」とした大会宣言を発表した。

## 大震災の教訓を未来へ

東浦で子ども防災会議

12カ国から400人参加

「大震災の教訓を未来へ命の尊さを考えよう!」をテーマにした「防災世界子ども会議2005」が28日、東浦町の県立淡路夢舞台国際会議場であり、日本を含む12カ国から約400人が参加した。

国交省、県、神戸市などで行った実行委の主催。会議では、齋藤和弘副知事が「この会議で学んだ助け合いの心やボランティア、防災教育の重要性をインターネットで世界に発信してください」とあいさつした。



ポスターセッションで自分たちが考えた非常持ち出し袋などを説明する神戸市立榎野台小の児童たち  
＝東浦町の県立淡路夢舞台国際会議場で

どが日ごろ成果を発表した。インドネシアの代表はスマトラ沖大地震による津波の被害を報告し、防災に対する備えの重要性を訴えた。

会議では、「3月28日を防災について考える出発の日と位置づけ、「いつまでもましまさずものを感じ、そこから学び、共有していく」ことを合言葉に、これからも活動を続けていきます」との宣言文を発表した。

【登口條】



「何ができるか考えよう」。宣言文を読み上げる各国の子どもたち―県立淡路夢舞台国際会議場

### 世界防災子ども会議閉幕

#### 災害救援私たちの手で

子どもたちの視点で防災や災害救援について話し合ってきた「世界防災子ども会議2005 in ひょうご」は28日、兵庫県津名郡東浦町の県立淡路夢舞台国際会議場で最終日を迎えた。日本を含む12カ国の小学生から高校生まで計60人が「これからも何ができるかを考え、議論し、共有し続ける」とする宣言文を採択、閉幕した。

学校間の国際交流を進めるNPO法人「ジェイアーン」(本部・神戸市中央区)などによる実行委員会の主催。

最終日は参加者が事前に半年間学習した成果や母国の災害の被害状況を報告。スマトラ沖地震による大津波で母と弟を亡くした女子高校生、ウィザー・プトゥリ・メララッナさん(18)らインドネシアの2人は「学校はテントを張って再開されたが、先生も多くが亡くなり、数が足りない」と訴えた。

最後は全員で「さくらさくら」を合唱し、防災について今後も一緒に学ぶ決意を固めた。



<p>アチエの高校生2人  <b>母国の家族          無事を確認</b>          スマトラ沖西方で起きた地震の被害に見舞われたインドネシア・アチエ州から来日、神戸市内に滞在している高校生ムハ</p>	<p>マド・イクバル君(二七)、ウィザー・プトゥリ・メラッオさん(二八)が、家族の無事を電話で確認したことが三十日、分かった。          昨年のスマトラ沖地震で家族や親類を失った二人は、「世界防災子ども</p>	<p>会議2005 in ひょうご」への参加のため今月二十四日来日、神戸市内に滞在中、今回の地震が起きた。          発生直後から現地との連絡が途絶えていたが、二十九日夜になって電話がつながり、二人とも父親と話したという。イクバル君は「揺れは非常に大きかったけれど、津波は少しかったと言っていた。家族が全員無事で、本当にうれしい」と安心した様子だった。          二人は三十一日に帰国する。</p>
---	---	---

# 防災のごと世界中で考えよう



国内外で大地震があいつぐ中、大きな自然災害を  
経験した日本やインドネシアなどの子どもによ  
る「防災世界子ども会議」の「ひょう  
」が、二十五日から二十八日まで兵庫県東播磨町  
（淡路島）などで開かれました。地震の被害を小さ  
くするためにできることは何か、体験や学んでき  
たことをもとに話し合いました。（蒲田 哲）

防災への思いを記したポ  
ードを手には、宣言文を発  
表する参加者たち。どち  
らも兵庫県東播磨町の淡路  
夢舞台国際会議場で

## 12の国や地域から 防災世界子ども会議 淡路島（兵庫）

参加者はそれぞれ  
五月九日から、一  
週間とは何か「地震  
が起きたらどうした  
らいいのか」など五

子ども会  
議は、阪神  
淡路大震災  
から十年た  
ったのを機  
に、「大震  
災の教訓を  
子どもたち  
につたえよ  
ろ」と、学  
校の先生ら  
がつくる国  
際教育のグ  
ループ「J  
E.A.R.N.  
」（兵庫東神  
戸市）など  
が企画。日  
本やインド  
ネシア、イ  
ランなど、  
十二か国・  
地域から、  
小中学生と  
高校生が百  
人以上が集まりまし  
た。



参加の子どもたちは、海外からの参加者に学校での取り組みを説明し、募金もよびかけました

阪神大震災から十年、学校の先生らが企画  
小学生ら百人以上が参加  
持ち出し袋や  
マップづくり  
「災害の経験つたえたい」

つこのテーマごとに話  
し合い、学校どうし  
インターネットやテ  
レビ会議で交流して  
きました。今回の会  
議でこれまでの取り  
組みを発表しあった  
のは、豊野小（神  
戸市）の六年生です。  
外国出身の人から話  
を聞いたたり、アンケ  
ートをこつたりしな  
がら、クラスごとに  
水、ラジオ、ライト  
など災害時に必要な  
品をリストアップし、  
海外からの参加者に  
説明し、海外からの  
募金を呼びかけまし  
た。

自分たちで考えた  
非常用持ち出し袋な  
どについて発表した  
のは、豊野小（神  
戸市）の五、六年生  
は、海外の自然災害  
の調査や防災マップ  
づくりに取り組み、  
被災した人々への  
心のケアについても  
学んだといっています。  
その成果を、ボスタ  
ー展示のコーナーで  
海外からの参加者に  
説明し、海外からの  
募金を呼びかけまし  
た。

「世界には防災の知  
識が十分でない子ど  
もがたくさんいま  
す。災害を経験して  
わかったことをたく  
さんの人につたえて  
いきたい」  
会議の終わりに、  
参加した子どもたち  
は「被災者の気持ち  
をわかってあげ、こ  
れからの防災につ  
いて考えていこう」とい  
う宣言文を発表しま  
した。

「世界には防災の知  
識が十分でない子ど  
もがたくさんいま  
す。災害を経験して  
わかったことをたく  
さんの人につたえて  
いきたい」  
会議の終わりに、  
参加した子どもたち  
は「被災者の気持ち  
をわかってあげ、こ  
れからの防災につ  
いて考えていこう」とい  
う宣言文を発表しま  
した。

切になる」とつた  
えました。  
朝小（愛知県名古屋  
市）の五、六年生  
は、海外の自然災害  
の調査や防災マップ  
づくりに取り組み、  
被災した人々への  
心のケアについても  
学んだといっています。  
その成果を、ボスタ  
ー展示のコーナーで  
海外からの参加者に  
説明し、海外からの  
募金を呼びかけまし  
た。

■ ■ ■ ■ ■  
会議に向けた六か  
月間の学習の間に  
も、スマトラ沖地震  
や津波、新潟県中  
越地震などで、左  
さんの人が  
被害にあ  
いました。  
インドネ  
シアのモ  
ハド・イク  
バルくん  
（十七歳）はスマ  
トラ沖地震で友だ  
ちを失いました。  
「世界には防災の知  
識が十分でない子  
どもがたくさんいま  
す。災害を経験して  
わかったことをたく  
さんの人につたえて  
いきたい」  
会議の終わりに、  
参加した子どもたち  
は「被災者の気持ち  
をわかってあげ、こ  
れからの防災につ  
いて考えていこう」とい  
う宣言文を発表しま  
した。

淡路市と神戸市で21日～22日に開かれた「防災世界子ども会議2009 in ひょうご」。日本をまわって各国の小学生から高校生まで計60人が、防災や災害救援について話し合い、学んだ。福岡県西戸地

蔵が21日に起きたばかりだが、会議は熱を帯びた。参加した子どもたちは会議から何を得た、今後どうつなげようとしているのか。議論や報告を振り返った。

(石崎勝伸)

# 考え合っ輪 広がった

## ▽違いの発見

同会議は、インターネットで学校間の国際交流を進めるNPO法人「シェアード」(本部・神戸市中央区)などからなる実行委員会の主催。昨年9月から国内外4校、1000人以上の子どもの事前学習を始め、今回の会議はその代表が半年間の取り組みを発表する場でもあった。

地域の発生メカニズムを調べたり、防災マップを作るなど、成果が次々と報告された。非常用持ち出し袋の中身をチームに選んだ神戸市西区の市立野野台小学校の児童たちは、事前学習でイラシ、ルーマニア、フィリピンの留学生を招いた経験を発表。「聖書を持ち出す」「ナイフが必要」などの意見があったと、袋の中身がその国の宗教や風土がかわっていることを書き残した。

また、昨年12月のスマトラ沖地震による津波で親類を亡くしたインドネシアの高校生、ムハマト・イバル君は「津波が何が分からないまま、多くの人が亡くなった。学校では災害から身を守る方法は学ばなかった」と報告。日本では、阪神・淡路大震災など災害のたびに被害が集中する高齢者らの対策が課題となっているのに対し、インドネシアでは多くの子どもが命を奪われた状況も訴えた。

防災のあるべき姿は、国や地域の社会的背景や考えられる災害によって違い、考えは一つではない。子どもたちはその点にも気付いた。

## ▽強い意志を力に

翌々最終日、会議としての

重責を担うことになる。神戸市東灘区の県立灘手高校環境防災科3年生、中野元太君からは「議論をしていく中で多種多様な意見が出された。その時、私には重責以上に大切なことがあることを知った。博士で話し始めた。

そして「ここで議論をやめて重責を伴うより、何ができるかを考え、議論し、共有し続けることが大切。おもしろい。災いについて考える出発の日として、これからは活動を続ける」と結んだ。会議では、参加者が抱き合

## 淡路市などで防災世界子ども会議

# 命の尊さを胸に刻む



防災や災害救援のあり方を話し合う参加者。1日、神戸市中央区、よしの会議室国際センター

つ別れを惜しむ姿があとを思われた。それぞれの国に帰った後も、スマトラ沖地震で被災した子らのために街頭募金を行うほか、ネットで情報交換しながら、各地の防災や将来の災害救援でも協力して行動を起すという。

正高校教師の岡本和子実行委員長は「子どもたちは国が違うでも、命の尊さと仲間大切さは変わらないことを胸に刻んだ。この会議で培った強い意志は将来、もっと大きな力になる」と期待している。



防災世界子ども会議 兵庫・淡路島で



火消隊の活動報告を聴き取り組みを報告する練習中の生徒たちー兵庫県の淡路島で

# 防災 私たちも考え活動を続けよう

福岡沖地震や二度にわたるスマトラ沖大地震など、大きな地震が続いて発生しています。こうした中、自然災害を経験した国や地域の子どもが集まる「防災世界子ども会議2005 in ひょうご」が、三月下旬、兵庫県の淡路島で開催されました。

防災世界子ども会議は、国際教育を支援するNPO「I.E.A.R.N」が中心となつて企画。阪神大震災から十年がたったのを機に、「大震災の教訓を未来へ命の尊さを考えよう！」をテーマに開かれました。

この取り組みは、去年の九月から自然災害を経験した海外の十五の国や地域の三百人、日本の七百五十人の子どもたちが参加してスタート。学校ごとに地震の仕組みや心のケアについて調べたほか、インターネット

トやテレビ会議なども通じて、交流してきました。子ども会議は、そのまゝめとして、日本やインドネシア、イランなど計十二の国や地域の小学生から高校生まで、百人以上が集まって開かれました。

も始めてからは、地域ごのつながりや、日頃から準備することの大切さを実感している」と森大政也君（三年）も、家でも地震に備えて、枕の近くに靴を置いて寝ているそうです。

「金野泰久君（三年）は、「地震のニュースにとっても敏感になっています。いつどこで発生するか分からない、ということを中心にしっかりとしておくべき」という思いを強くしています。インドネシアのパンダチエのモハド・イクバル君（17）は、昨年のスマトラ沖大地震と津波で友達を失いました。「地震を経験するまで、子どもには『防災』という考えがあまり知られていなかった。自然災害から、自分の命を守るための教育を込めることが大事」といいます。

東京都墨田区の練南中学校も参加した学校の二つです。二〇〇二年度から、防災組織「練南少年少女火消隊」を結成、消防署から消防ポンプの使い方の指導を受けるとほか、地域の防災訓練にも参加しています。

神戸市兵庫区の養心中学では昨年度、総合学習の時間を活用して、防災グッズの作成や、今後予想される東南海地震や津波について学習。ほかにも、地域のグループでの避難活動や連絡方法のシミュレーションなど、実践に基づいた訓練もしました。阪神大震災で被害にあった中学生もいま